

BLマンガ研究の多様化に向けて

作品研究の概観と展望

秦美香子

(花園大学文学部創造表現学科)

はじめに

本論の目的は、主に「女」の「男性同性愛ファンタジー」を描くとみなされてきたボーイズラブ（以下BL）を、それとは異なった視点からも分析する可能性を広げることである。この目的は、(1) BL作品研究が、他ジャンルの作品研究との間で相互参照されること、(2) とくにマンガ作品の研究が、商業的なジャンル区分を前提に行われるだけでなく、多様な分析区分によっても行われるようになること、を展望するために設定されたものである。

上記の目的の下で、本論は、BLの研究（BLジャンルに焦点を置いた研究）のなかで、BL作品が、(1) 女性のセクシュアリティ、(2) リアル／ファンタジー、という2つの視角から語られていることを概観する。そのうえで、これ以外の視角からBLをとらえようとする研究（とりわけ、英語で近年に発表された研究）¹に、本論では注目する。先行研究の議論を概観することをとおして、BLで研究すること（BLとカテゴライズされている作品を対象のひとつに取り上げる、しかし自立的ジャンルとしてのBLに焦点を置くのではない研究）の可能性について本論では考察する。本論は、筆者がマンガ研究者であることから、おもにBLマンガ、およびマンガ研究を想定してまとめられている。ただし、本論の議論は、マンガというメディア様式に限定されるわけではないと思われる。

BL作品は、BLの研究の対象としては日本の内外を問わず分析されている。半面、BLで研究すること、つまり、文学研究やマンガ研究のなかで、分析対象のひとつとしてBLも取り上げる研究は、いまのところ多くない。それは、BLがジャンルとして有徴化され、周縁化されてきたことに関わる問題かもしれない。言葉を換えれば、女性のセクシュアリティに関する語りを、隠匿されるべきもの、あるいは、まともに評価するに値しないもの、と評価するジェンダー規範の問題が関係しているかもしれない。

しかし、それだけでなく、BLが「女」の「男性同性愛ファンタジー」を描いたものであり、3つの二項対立のセット、つまり、(1) 描かれる関係が異性愛／同性愛、(2) ターゲットや作り手が女／男、(3) 浮かび上がるセクシュアリティの領域が女／男、という視点を外してBLを考察することはできない、と見なされているかのような研究の現状も、BLで研究することを阻害する要因になっているように思われる。確かにBLを、女性のセクシュアリティに関する語りとして捉えることで得られるメリットは大きいだろう。しかし、BLを専門的に分析するのではない筆者は、女性のセクシュアリティに関する語りとしての側面以外の視点からの研究、つまり「BLで研究」の方により大きな関心に向けている。

なお、本論ではBLで研究する視点をいくつか展望するが、それはBLの研究以外の研究がBLを分析対象として「搾取」することをすすめるものではない。しかしBLを他の分析対象から区別し、不可侵のものとして「ほっておく」必然性もないように思われる。さまざまな視点からの研究、とくにマンガ研究が行われるとき、ほかの表現と同列に、BLとしてカテゴライズされている作品も取り上げることで、研究の幅が広がることを展望したいのである。

¹ 本論は、「BL研究の概観と展望——作品研究の多様化に向けた検討」（日本近代文学会国際研究集会、2013年12月1日）での報告に基づいている。国際研究集会という会議の目的意識のもとで報告を行ったため、英語で発表された先行研究を中心に取り上げた。

「ボーイズラブ (BL)」の定義の確認

本論では「ボーイズラブ」を、マンガや小説などの各メディア形式を横断して展開する語りの様式ととらえる。この前提のうえで、BLを定義するために、まずは石川(2009)の議論を参照したい。

石川(2009)は「やおい」を「日本における、女性作者と女性読者による男性間の恋愛を主題とした作品群およびそれらを読み、書／描く行為を含む表現活動の総体」と広くとらえたうえで、一般的には、「やおい」という語は「男性同士の恋愛／性愛を主題とした女性向けの作品」または「その二次創作」を指すジャンル名として使われていると説明する(石川 2009, 222)。また、「ボーイズラブ」を「商業誌に掲載されるやおい作品を指す名称」とまとめている(石川 2009, 224)。石川(2009)の「やおい」および「ボーイズラブ」定義は、「日本」という限定は外されることが多くなったものの、現在もっとも広く共有されているもののひとつである。

また、とりわけ近年では、出版形態やディストリビューションの大小によってジャンルを異なった名前で呼ぶことをせず、「ボーイズラブ」を総称として使用することもある。Levi, McHarry and Pagliassotti 編(2010) *Boys' Love Manga* でも、個々の論考では YAOI という語も使われているが、本全体では「ボーイズラブ」が総称として使われている。語り手の世代にもよるが、とくに同人活動に焦点を置く場合には「やおい」、物語の種類やジャンル総体に目を向ける場合には「ボーイズラブ」という呼び方をすることも一般化してきているように思われる。

これらの主流の区分とは別に、総称として「ボーイ (ズ) ラブ」、性表現が直接的なものを「やおい」と呼ぶパターンもある。Wood(2006)は *boy-love manga* を、おもに女性によって女性のためにつくられた、「男性主人公同士の homoerotic love を絵的に(visually)描いているロマンティックなナラティブ」とし、そのなかでも性表現がより暗示的なものを「少年愛」、より明示的なものを「やおい」と言い表している。

このように、論者によってキーワードの定義がずれるところが、「やおい」または「ボーイズラブ」をめぐるさまざまな言説を先行研究として横断的に概観することを困難にさせる、と石川(2009)は指摘している。本論も石川(2009)の問題意識は共有するものの、「やおい」または「ボーイズラブ」のいずれかをアンブレラ・タームと設定し、その下位概念としてもう一方の用語を使用する仕方ではなく、「男性登場人物同士の親密な関係」を描いた作品群のなかで、二次創作されたものを「やおい」、オリジナル作品を「ボーイズラブ」と呼びたい。セッション内の他の筆者と使用の仕方がずれているかもしれないが、このずれが、石川(2009)の指摘するBL研究のひとつの問題でもあるし、おそらくは興味深い特徴でもありと考えるべきである。

さて、いま述べたとおり、本論では「やおい」と「ボーイズラブ」を、オリジナルか二次的創作物か、という基準で区別したうえで、オリジナルに制作された作品群を念頭に議論を展開する。なおここでいう「オリジナル」は、しばしば言われる「商業出版」とは異なる。作品が商業的出版物かどうか、つまり、アーティストと編集者の間のやりとりを経て、出版社の媒介によって商品として流通しているものかどうかには本論ではこだわらない。先行研究でも、発表媒体が商業誌／同人誌という区別がしばしば重視されることがあるが、その区別は実際にはオリジナル／二次創作の意味で使われている。

二次創作を区別する理由は、二次創作にはオリジナル作品とは異なったパターンや規範がある可能性を考慮するためである。たとえば東(2010)は、「『やおい』系女性オタクたちが行っているのは、ある作品を男同士の愛を描いたものと見なす『やおい』理論を用いての、原作の人間関係の解釈を競い合う解釈ゲームだといえよう(中略)『やおい』のマンガや小説は、自分の解釈を示す『論文』なのである」とととえているが(東 2010, 256)、こうした構図を、オリジナル作品にも直接あてはめることは当然できないだろう。二次創作の「やおい」について述べた先行研究も、本論では適宜参照するが、全体の議論は二次創作にはあてはまらない部分も大きい。

以上、本論では、「男性登場人物同士の親密な関係」を描いたオリジナル作品を「ボーイズラブ」とみなすと述べた。しかし実は、これはBLの定義としては不十分である。ここで改めて、先述した先行研究の「ボーイズラブ」定義に、「女性」というただし書きが必ず付けられることに注目する。

こうしたただし書きが必要とされるのは、まずは、事実としてBLの担い手にジェンダー差が見られる、という点がある。吉澤(2012)は、二次創作のやおいについてはあるものの、「やおいという現象には、やおいに耽溺するのは女性だけである、と断言してしまってもまったくの嘘にはならないといえるくらい、圧倒的なジェンダー格差がある」と述べている(吉澤 2012, 113)。少なくともBLは、男性読者もとりわけ近年では増えているが、現状ではいまだ、どちらかというとな女性がジャンルの担い手の多数派を占めているといえるだろう。

一方、担い手のジェンダーだけでなく、描かれた内容にもジェンダー差が見出されることがある。それは、「ゲイを描いた表現一般」と「ボーイズラブ」が区別されるときである。たとえば飯野(2010)は、ボーイズラブについて、「現実の同性愛者のセクシュアリティを表現しようとしているわけではなく、女性読者の中にある幻想の同性愛を描いて成り立っている。読者は現実のホモセクシュアルが漫画とはまったく異なるものであることを十分認識した上で、「自分の望む男性同性愛の世界」を楽しんでいる」と述べている(飯野 2010, 60)。

こうした議論からわかるのは、「ボーイズラブ」は、「男性登場人物同士の親密な関係」を描いたオリジナル作品を、女性の担い手/女性に限らない担い手、リアル/ファンタジー、というふたつの基準によって分類することで確認可能になるジャンルだとみなされている、ということである。どういう意味でこれらの軸が共有されているのかを、先行研究の知見からまとめたい。そのうえで、「BLで研究」の視点を展望してみたい。

BLの研究：女性のセクシュアリティという視点

まず、「女性」という側面に注目して、先行研究の知見を簡単に紹介する。BLは、女性のロマンティック/エロティックファンタジーのひとつのパターンと見なされることが多い(たとえば堀 2009、守 2010)。つまり、描かれる登場人物が男性であるのに対して、その描写から浮かび上がるのは女性のセクシュアリティだということになる。これは、異性愛男性向けエロティック表現で女性身体が描かれることと対の事象のように見えるかもしれない。しかし、先行研究のなかでBLに見出されてきた意味は、特徴的なものである。BLは、たんにターゲット読者の欲望の対象となるであろう身体(異性愛男性向けエロティック表現でいえば女性身体)が描かれた表現なのではなく、「そこに女の姿がないからこそ、女が自由に性的なものを含めたファンタジーを楽しめる」ようになるもの、つまり、女性登場人物が性愛関係の当事者として描かれないことで「(女)に付せられた取り決めや社会的な視線を意識しなくて済む」ものとされる(堀 2012, 181)。

議論のひとつのパターンは、BLは女性のセクシュアリティを多様な形で描き出している、というものである。たとえば上野(1998)は、純潔規範があるために女性身体では描けなかった身体的な性愛の世界を描いたのが、BLややおいの前身とされる「少年愛」であったという。また、優先的な言説秩序では性的な客体の位置は「女性専用」とみなされるが、その位置に男性のキャラクターを置いてみせることでヘゲモニックなセクシュアリティ編成に対抗するのがBLだ、という笠間(2001)の指摘もある。こうした指摘は、BLは現在のジェンダー秩序のなかで「女性のセクシュアリティ」とされるものを男性登場人物の姿によって描いている、つまり、BLは女性のセクシュアリティを描いている、と暗示しているように読み取れる。

近年の議論では、男女の二項対立という図式は必ずしも明示されなくなっている。しかし、たとえばWood(2006)のように、「ジェンダー・アイデンティティやセクシュアル・アイデンティティに関する一枚岩的な理解を拒む」キャラクターとしてBLの男性登場人物を語るパターンは、いまでも見られる。Wood(2006)の議論では、男性が作り、男性が読むマンガの「きわめて男性的でファロスのな、理想化された男性」と対照的なものとして、女性のアーティストが描く「両性具有的で美的な男性キャラクター」が言及されており、少年愛について語られた議論が引き継がれている様子が見て取れる。

一方、堀(2009)は、読者の読みのパターンをもとに、セクシュアリティについて考察している。堀(2009)は、BLが「攻め」にも「受け」にも同一化できる表現であると指摘する。なお、ここでのBL読者は、おもに女性が想定されている。女性が何に同一化して、どの対象を見つめている(欲望している)かを詳細に分析していくこの堀(2009)の論考でもやはり、BLが「女性のセクシュアリティ」に深く関わる表現であることが念頭

におかれている。

BLで研究：女性のセクシュアリティだけにとどまらない視点（1）

BLが間接的にでも浮かび上がらせている「女性のセクシュアリティ」、あるいは現在のジェンダー・セクシュアリティの編成を攪乱するようなセクシュアリティは、かつての議論でいわれたように、女性身体をもつキャラクターでは表現不可能とされるものでは、もはやない。少女マンガでも、小説でも、自伝的な語りでも、「女性のセクシュアリティ」は、さまざまな形で表現されている。現在のBLは、「女性の身体ではないから女性のセクシュアリティを表現しえたもの」ではなく、数ある「女性のセクシュアリティ表現」のひとつのオプションとして選ばれているに過ぎないだろう。こうした視点から行われた研究の一例を挙げると、飯野(2010)では、女性の「セクシュアリティを中心とした世界観（幻想、欲望、夢）」を明らかにするために、BL、レディーヌコミック、コンセプトカフェ、ホストクラブ、が分析されている。

また、とりわけ近年注目の集まる、女性の自伝的な語りのなかでは、セクシュアリティの問題が扱われることが少なくない。こうした、「自分」のキャラクターが登場するなかで語られるセクシュアリティを研究する際には、「自分」の位置を外すことで成立していると語られるBLの世界との対照性に注目することが、新しい視点を提供してくれるかもしれない。

さらに、BLを、セクシュアリティに絡んでいるが、そこに「女性の」という限定詞が必ずしもつくわけではない、という視点も示されている。

Kamm(2013)によれば、BLは自分自身の経験からかけ離れた世界・知らない世界を描いているから面白い、と感じる読者もいる（Kamm 2013, 3.4）。また、読者自身には危険が及ばないなかで、リスクなシチュエーション（BDSM、レイプなどタブーとされていること）を楽しめる、という“controlled loss of control”が楽しみの要素になっている場合もある（Kamm 2013, 3.7）。後者に関しては、すでにMcLelland(2000)が議論しているところでもある。こうした語りは、他者の表象に対する共感の低さという点で「政治的正しくなさ」を批判されてきた点でもあるが、その評価をひとまず保留にすれば、「女性のセクシュアリティ」の領域に入れられてこなかった性行動や性的ふるまいのイメージを楽しむことを可能にさせるという点で、上野(1998)などが指摘した「少年愛」の仕組みが引き継がれているともいえる。ただしここで、読者自身は「女性には出来ないこと」としてリスクな性的娯楽の描写を読んでいるわけではなく、あくまでも「自分はやっていないこと」としか認識していない、という点には注意しておきたい。

一方、東(2009)は、「性的なものから非性的なものを浮かび上がらせる」という仕方で、BLなどについて検討している。「少しでも性的な要素が関わっているように見える文化現象は、とかくセクシュアリティという観点からだけで説明されがちである。だが、それでは見落としてしまうことではないだろうか」という問題意識から、東(2009)は、「一見したところでは非常に性的な「やおい」の中の男同士の関係性」を、「私的領域に拡張されたホモソーシャルリティとしてのホモセクシュアリティが描かれ、そこではホモセクシュアル関係が“隠れホモソーシャル”になっている」と論じる（東 2009, 276-277）。

これらの先行研究は、より広いセクシュアリティの視点から論じたり、セクシュアリティ表現に光を当てることで陰に隠れてしまった他の要素について論じたりすることで、BLの研究を他の視点と絡めて展開させるものである。

BLで研究の展望：女性のセクシュアリティという視点（2） セクシュアリティと絡めてBLを考えること自体の検討

上記の先行研究によって展望したのは、「女性」の「セクシュアリティ」表現の多用な展開の一端としてBLをとらえる視点であった。ここではさらに、「セクシュアリティ」という視点自体をとらない研究を紹介したい。

Kamm(2013)は、BLのファンが「なぜ」BLを好きかに関心の焦点を置きすぎる研究を批判している。

Kamm(2013)によれば、BLの作り手も受け手も、BLを好む動機として「楽しいから」ということをよくあげているが、それが研究では無視されがちで、BLに向かう何らかの隠された理由（セクシュアリティの問題など）があると想定する研究や批評が多い（Kamm 2013, 2.9）。その「楽しみ」は、BLストーリーのメインテーマである‘What if?’にあるとKamm(2013)はいう。つまり、もしこうだったらどうだろう、と読者が能動的に想像することがBLの楽しみにある、ということである。

また、利用と満足研究の見地から、繰り返しBLを読むことで、BLを読めばどうという効用が得られるかわかるようになるから、たとえばストレスを感じたときにリラックスするためにBL（のなかの一ジャンル、あるいは特定の作家の作品）を読む、という図式もKamm(2013)は指摘している（Kamm 2013, 4.5）。

さらには、ある男性読者の事例も注目に値する。Kamm(2013)によれば、この読者はかわいいものが好きで、当初はBLを読んでいなかったが、BLのかわいさを知って以来、かわいいBLだったら読む、という読者になった。BLがいちばん好きなジャンルではないが、かわいいBLを読んだことでBLも好きになり、男性同士の関係を描くカテゴリに属する作品がその読者のマンガ利用のパターンの中に含まれるようになったのである（Kamm 2013, 4.6）。

Kamm(2013)の調査からは、読者がBLに何を求めるかが多様であることが見て取れる。Kamm(2013)のような問題意識が持たれるに至ったのは、吉澤(2012)も指摘する、BLが「ジェンダー」の「問題」として主題化されることで、逆に、それがいったい何であるのか、その核心には何が在るのかということ、すなわち「やおいとは何か」というもっとも根本的な問題を背景に退かせてしまう」（吉澤 2012, 114）という問題意識があるためだろう。吉澤(2012)はこのような問題意識を持った結果、ジェンダー論的視点を相対化するために、BLをめぐる事象を「オタクという社会現象の一環として位置づける視点」から考察する。なお吉澤(2012)はジェンダー論的視点が不要だといっているのではなく、このような仕方でも考察することで、「逆にやおいがジェンダーの「問題」であることの意味が、新たに浮き彫りにされるだろう」（吉澤 2012, 114）と考えていることには留意しておきたい。

同様に森川(2007)も、「オタクという社会現象の一環」としてBLを論じている。森川(2007)はBLなどを好む女性を「女性のオタク」と表現し、BLの物語構造を少女マンガのパターンに絡めて考察する。そのうえで、これを少年マンガのパターンと比較し、「男性から見た少女漫画は、あたかも恋愛で世界が回っているかのように感じられる。逆に、女性から見た少年漫画は、闘争と性欲が続べている。（中略）その少年漫画を、少女漫画の原理で描き替える」という操作を行ったのがBL・やおいである、とまとめる（森川 2007, 50）。森川(2007)のような、ひとまずはジェンダーやセクシュアリティの問題としてでなく「少年漫画」の物語構造と「少女漫画」の物語構造との比較からBLを論じ、結果的に「男性のオタクと女性のオタクは、同床異夢のごとき様相を呈している」（森川 2007, 50）とジェンダーの視点に至る、という道筋の立て方は、マンガジャンルの展開の問題としてBLを相対化するものといえる。

BLの研究の視点：リアル／ファンタジーという軸をもとに

次に、BLが定義されるときのもうひとつの軸である「リアル／ファンタジー」という側面に注目する。

リアル／ファンタジーは、BLをめぐる議論のなかで最も活発に交わされている論点のひとつである。まず先に、「そもそもリアル／ファンタジーという二項対立をもってBLを語ること自体が誤りである」という批判があることに簡単に触れておきたい。日本の議論のなかでは、リアル／ファンタジーという二項でBLが語られることは、しばしば、現実の男性同性愛のイメージの領有であり、表象暴力である、という問題意識に結びつくことがある。また石田(2009)は、やおいやボーイズラブが、「他者」としての「男同士」の恋愛・性愛物語を資本に転化する構造をもつという視点からも批判を行っている。しかし、本論が注目したいのは、「ボーイズラブは「現実」の同性愛者の物語とは異なる」という感覚が政治的に正しいのかどうか、ではなく、あくまでも、BLがその担い手たちによってどのような表現として語られているのか、その結果、研究のなかでどの

ように考察されているのか、ということである。その政治的正しさの度合いを評価することは本論の主旨には含まれないので、ひとまず保留しておきたい。

B Lと「リアルであること」に注目した論考の最近の一例として、とくに文化を横断する視点にも言及しているものとして、Alexis Hall の論文を取り上げたい(Hall 2010)。Hall(2010)はアメリカのファンへのインタビューをもとに、B Lがどのようにして unreal あるいはファンタジーの表現と語られているかを分析している。Hall(2010)によれば、B L作品は「ゲイらしさ」の度合いを検討された結果、「リアルではない」と判断される。「ゲイらしさ」とは、主に、周囲からひどい扱いを受けるかどうか(victimization)、そしてカミングアウトの問題が絡んでくるか、という2点によって構成されており、そういう場面が描かれていると、その作品は「リアル」であると判断される。つまり、ここでいわれる「リアル」な世界とは、heteronormativityがある世界のことである。

なお、急いで付け加えておきたいのは、これはB Lを読んだり描いたりする者たちが heteronormativity の規範を内面化し、異性愛ではない関係を異端とみなし、そのような価値観を積極的に再生産している、という意味ではもちろんない。たんに、読者が「この社会では異性愛が規範とされている」という知識を持っていて、その知識との整合性によって「リアルさ」を判断している、という意味である。

Hall(2010)の考察によれば、アメリカのB Lファンは、描き手や読み手が男性同性愛の経験を持っていない、ゲイ男性がB Lはリアルではないと言っている、登場人物の関係がロマンティックに描かれている、といった点から、「ボーイズラブはリアルではない」と判断している。ただしアメリカのファンの場合、そこに、「同性愛をめぐる日本の事情はアメリカと異なるらしい」といった、文化の違いを見いだす視点が入ってくることもある。このような視点からB Lが読まれるとき、それは単にリアル／ファンタジーという問題ではなく、文化によって同性間のセクシュアリティは多様である、という認識につながったりする。したがって、アメリカ的な同性愛アイデンティティをめぐる物語が不在であるという点から、日本のB Lが魅力的と見られる場合もある(Hall 2010)。

こうしたB Lの受容を、「日本の男性同性愛」イメージの領有である、と断罪したい人もいるかもしれない。しかし、「アメリカで一般的な同性愛をテーマとした物語のパターンと、日本のB Lで描かれる同性愛物語のパターンは違う」という認識が、ただちにステレオタイプな「日本の男性同性愛」イメージの固着化に結びつくとは限らない、と本論では考えておきたい。

Hall(2010)の議論にしたがって、B Lは「リアル」な(アメリカ的)同性愛関係を描いていない、と判断すれば、次に出てくる問いは、では何を描いているのか、というものである。Hall(2010)の議論では、それが「理想的な男性同性愛」を描いている、と読者に理解されていることが紹介されている。一方、ファンの読みの研究ではなく表現の研究からは、B Lが可視化するのとは、同性愛や異性愛というパターンに還元できない関係性であるという指摘もある。

吉澤(2012)は、二次創作のやおいについて、ジェンダーの二元論的な意味づけに回収されない、「新しい自由な関係性への志向」があると述べる(吉澤 2012, 127)。つまり、やおいが描くものは「現実のゲイ(ホモセクシュアル)」を描いたわけでもないし、「男性と女性の恋人同士の間をただ男性と男性に置き換えただけ」でもない、「徹頭徹尾虚構」の関係なのである(吉澤 2012, 126)。吉澤(2012)はやおいとB Lを明確に区別しているものの、この志向はやおいとB Lの間で共有されており、その点からいうとB Lはそのような「やおいたい欲望を満たすツールとして、やおいから進化したその発展型である」と考えられるかもしれない、と述べている(吉澤 2012, 141)。

このような理解からいえば、B Lは「現実のゲイは、社会の heteronormativity のせいでアイデンティティの問題などで苦悩するはずだけど、B Lにはそういう規範がないので、理想的でよい」という読み方がされている、という Hall(2010)の指摘と、B Lは「現実にはない関係を志向する」という吉澤(2012)の指摘は、くいちがうものではない。どちらも、B Lは「現実の男性同性愛」を描いているのではなく、知識として

heteronormativityを知っている読者によって、それではない関係が志向され、それが「ファンタジーの男性同性愛」として具現化しているのだ、という議論になるだろう。

BLで研究の視点：リアル／ファンタジーという軸をもとに

ある社会成員のカテゴリがフィクション化され消費されることについては、人種やエスニシティ、ジェンダーをめぐる表象を対象とした研究のなかで、すでに数多く語られている。日本のマンガを対象とした研究でも、アフリカ系人種の表象を批判的に検討したラッセル(1992)などがある。人種などをめぐる議論では、ヘゲモニックな言説パターンが再生産される契機という視点から作品が批判的に分析されることも多い。一方、BLの例は、BLを「ファンタジー化されたフィクション」と位置付ければ、その対照として暗示される「リアルなフィクション」の問題をも浮かび上がらせることができる。

たとえば、スコット・マクラウドが図式化した「視覚芸術の視覚的ボキャブラリー」を参照してみたい(McCloud 1993=1998, 59)。これは様々なコミック表現の描画的特徴を分類したものであるが、これを応用すれば、BLをめぐるリアル／ファンタジーの議論にも、またBLで研究することにも、示唆を与えることができる。なお、マクラウド(1993=1998)の図式は主に図像(絵柄)の分類に特化されたものであるのに対し、本論ではこれを、意味と図像がどのように結びついているかという点から「誤用」していることを断っておく。

マクラウド(1993=1998)は、具象性・意味性・抽象性という3点からなるマップによって、世界各地のコミック表現を分類した。マクラウドによれば、具象性から意味性に向かう軸は、「意味性」に向かうほど、意味する指向が強くなる。描画はデフォルメされ、記号的になり、究極的には文字になる。一方、抽象性から具象性へとつながる軸では、具象性に近づくほど、「何かに似せる指向」が強くなる。

この図式を応用し、「男性同性愛」という意味がさまざまな描画によって伝えられる、ということを考えてみる。BLが批判される時、BLは、具象性・抽象性の程度にかかわらず、「男性同性愛」という意味を指向する表現であると位置付けられる。ゆえに、BLは政治的な正しさの評価の対象となり、「政治的に正しくない」ことが問題になる。これは前述した、人種の表現が差別的である、といった批判と同様の仕方での批判である。意味を指し示す記号でありながら、差し示されたその意味が適切でない、ということである。

一方、BLがファンタジー化された表現であり、決して「男性同性愛」という意味を指し示しているわけではないのだ、とする反論は、BL表現を、具象性・抽象性から判断される表現、つまり、「絵として男性同性愛に似ているが、意味からは離れた表現」として位置付けている。

このように整理すれば、BLと男性同性愛の表現をめぐる議論を、他の「差別」をめぐる表現だけでなく、さまざまな表現との比較のなかで論じることが可能になるだろう。それは必ずしも「表現がひとを差別すること」という大きな問題の解決には結びつかないが、議論を相対化し、他の議論との相互参照を可能にすることは出来るだろう。

さらに、こうした応用は、マンガ表現論、あるいは記号論の領域にとどまるものではない。ここで、より学際的な研究を展望するために、教育社会学や心理学的見地からマンガを分析する先行研究を手がかりとして、さらなる研究の広がりについて考察してみたい。

山田(2010)は、教員イメージを分析し、リアル／ファンタジーという二項によって対照的に編成されたパターンを教育社会学の見地から考察している。具体的には、テレビドラマやマンガなどフィクションの言説の中で賞賛される教師像と、報道やワイドショウなどの言説の中で批判される教師像の対照性が注目されている。主にフィクションのなかで繰り返されることで生成した「熱血教師」的な模範的教員像が理想化される一方で、そうした理想像に合致しない現実の教員が批判される、という構図を分析したうえで、山田(2010)は、両者とも結局は「虚構で作られた固定的イメージ」であり、それが教師という職業に対する理解を阻害していると論じる。

こうした「現実のものとして語られるイメージ(リアルなイメージ)」と「フィクションとして語られるイメ

ージ (fictitious なイメージ)」を比較する視点は、前述のマクラウド(1993=1998)の図式と接合可能であるし、そこで論じられているものがマンガに限らずさまざまなマスメディアの表現の分析に適用可能であることを示してくれる。

さらに、社会心理学などの領域では、parasocial interactions, parasocial relationships (擬似社会関係、以下 PSI/PSR) などのキーワードから、リアル/ファンタジーに関わる考察が行われている。この議論は主に、芸能人やテレビドラマのキャラクターなど、マスメディアのなかの人物と視聴者の間で擬似的に結ばれる関係に注目した議論である。情報の送り手と受け手の間に interactions がないのがマスメディアの特徴である (Luhmann 1996=2005) のに対し、擬似的には interactions があることを実証的に考察するのがこの議論の特徴である。

メディアの登場人物は、視聴者が一方的に相手を知っているだけで、双方向的な関係は結ばれていない。視聴者もちろんそれを自覚しているが、視聴者は同時に、そこに社会関係があるかのようにその登場人物に対する理解や共感、ときには反感を深めていく。なお、‘parasocial’ という概念は用いていないものの、マンガの登場人物が身近な人物と同じようにロールモデルとして機能し得ることを指摘する家島(2006)などの論考は、こうした議論を日本のマンガに応用する際の助けとなるだろう。

こうした議論とBLをめぐる議論を接合する際に適当であると思われるのが、伊藤(2005)などの「キャラ/キャラクター論」である。伊藤(2005)によれば、マンガの登場人物の画像には、その存在の同一性を受け手に認知させる強度となる「キャラ」という志向と、その存在に「人格」があることを認知させる「キャラクター」という志向がある。この議論をもとにPSI/PSRについて考えると、「キャラクター」志向の優越性が認められる登場人物と読者の間にはPSI/PSRが成立しやすく、「キャラ」志向が優越している登場人物との間にはPSI/PSRが成立しにくい、と推測することができる。「キャラ」志向が優越している登場人物と、「キャラクター」志向が優越している登場人物との間で、読者の「学び」の度合いが変化するかどうかを実証的に検証すれば、BLは読者のジェンダー・セクシュアリティ観(男性同性愛に関する意識など)に影響を及ぼすメディアになっている/なっていないという仮説を立てることができる。むしろ、PSI/PSR的な相互行為はジャンルやメディアにかかわらず生じるものであるため(それを示す一例は家島 2006)、この議論がBL以外のジャンルの作品にも適用できることは、いうまでもない。

中村(2008)が指摘するように、マンガの登場人物は同一作品内でも場面によってさまざまに描かれ方が変わることが多く、「キャラ」「キャラクター」のいずれかに登場人物を完全に同定することはきわめて難しい。「どちらかといえばキャラ/キャラクター志向」という暫定的な分類しかできないことが多く、作品単位で検討を試みることは注意を要するだろう。だからこそ、作品単位でなく登場人物と読者の間にそのつど生じる相互作用のひとつひとつに注目するPSIの議論を援用しながら考察を行うことが有益になるのではないと思われる。

以上のように、さまざまな道筋から、BLをめぐる「リアル/ファンタジー」を相対化することで、たんに、他ジャンルや他メディアの事例とBLを並び論じることが可能になるだけでなく、BLが現実の男性を他者化している、差別している、といった、表現と暴力の問題に関する議論も発展していくのではないか。

まとめ

以上、BLが、描かれる関係が異性愛/同性愛、ターゲットや作り手が女/男、浮かび上がるセクシュアリティの領域が女/男、という3つの二項対立のセットで語られる語りと見なされていることを出発点に、BLに対する「女のセクシュアリティ」、「リアル/ファンタジー」というパースペクティブを紹介し、それがBLで研究することを可能にさせる論点を展望した。

こうした思いつきをとおして最後に考えたいのは、BL研究の問題というよりも、マンガ研究の問題である。現状のマンガ研究では、商業的なターゲット・ジェンダーのセグメントが、研究のなかで再生産されている。たとえば、BLと同様に、少女マンガもまた自立的なジャンルとみなされ、ジャンルに固有の議論が深まってい

る半面、他ジャンルを扱う研究との相互参照が行われにくい。日本のマンガは、女向けジャンルが大きな市場を確立している珍しいメディアジャンルであり、女向けジャンルである少女マンガやBLにそれぞれ光を当てた研究を行うことには意義がある。しかし、ジャンル間に本質的な差異があることを前提に全ての研究が進められる必然性はない。

今は世界各地で、学際的な領域としてのマンガ研究の自立が、さまざまに模索されている。そのような学問領域の分析対象が、マーケットのセグメントを前提する必然性はない。マーケットのセグメントを基準に行われる研究も必要であると思われるが、とくに何重にも囲い込まれているように見えるBL研究に、ある意味では無神経に踏み込んでいく「空気の読めなさ」があってもいいのではないかと反省する。

【参考文献】

- 東園子、2009、「女性のホモソーシャルな欲望の行方——二次創作「やおい」についての一考察」（大野道邦・小川伸彦編『文化の社会学——記憶・メディア・身体』文理閣、263-280）
- 、2010、「妄想の共同体——「やおい」コミュニティにおける恋愛コードの機能」（東浩紀・北田暁大編『思想地図 vol.5』、249-274）
- Hall, Alexis, 2010, “Gay or Gei?: Reading ‘Realness’ in Japanese Yaoi Manga,” in Antonia Levi, Mark McHarry and Dru Pagliassotti (eds.), *Boys’ Love Manga: Essays on the Sexual Ambiguity and Cross-Cultural Fandom of the Genre*, North Carolina: McFarland & Company, 211-220
- 堀あきこ、2009、『欲望のコード——マンガにみるセクシュアリティの男女差』臨川書店
- 、2012、「リアルとファンタジー、その狭間で見る夢」（『ユリイカ 44(15)』、178-183）
- 飯野智子、2010、「セクシュアリティ表現とジェンダー」（『実践女子短期大学 31』、59-75）
- 家島明彦、2006、「理想・生き方に影響を与えた人物モデル」（『京都大学大学院教育学研究科紀要 52』、280-293）
- 石田仁、2009、「当事者性の発見から他者性の分析へ——やおい・ボーイズラブの（再）ジェンダー分析のために」（財団法人日本性教育協会編集発行『腐女子文化のセクシュアリティ』、39-54）
- 石川優、2009、「やおい論についての批判的考察と今日的課題」（『大阪市立大学大学院文学研究科紀要 60』、221-236）
- 伊藤剛、2005、『テヅカ・イズ・デッド——ひらかれたマンガ表現論へ』NTT 出版
- Kamm, Björn-Ole, 2013, “Rotten use patterns: What entertainment theories can do for the study of boys’ love,” *Transformative Works and Cultures*, 12. Doi: 10.3983/twc.2013.0427
- 笠間千浪、2001、「《解釈共同体》としての『やおい』サブカルチャー——消費社会の高度化と女性たちのオルタナティブな語り」（竹中恵美子・久場嬉子・三宅義子編『叢書 現代の経済・社会とジェンダー』明石書店、219-246）
- Luhmann, Niklas, 1996, *Die Realität der Massenmedien*, Opladen: Westdeutscher Verlag GmbH. (林香里訳『マスメディアのリアリティ』木鐸社 2005)
- McLelland, Mark, 2000, “The Love Between ‘Beautiful Boys’ in Japanese Women’s Comics,” *Journal of Gender Studies*, 9(1): 13-25
- McCloud, Scott, 1993, *Understanding Comics: the Invisible Art*, New York: Harper Collins Publishers. (岡田斗司夫監訳『マンガ学』美術出版社 1998)
- 森川嘉一郎、2007、「オタク文化の現在(9)——女性のオタクの諸問題」（『ちくま 440』、48-51）
- 中村唯史、2008、「マンガにおける「リアル」の問題」（『平成 16-18 年度科学研究費補助金 研究成果報告書』）
- ラッセル、ジョン・G、1992、「日本のマス・メディアにみる黒人像」（『解放社会学研究 6(7)』、7-40）
- 上野千鶴子、1998、『発情装置——エロスのシナリオ』筑摩書房
- Wood, Andrea, 2006, “‘Straight’ Women, Queer Texts: Boy-Love Manga and the Rise of a Global

Counterpublic,” *Women’s Studies Quarterly*, 34 (1&2), 394-414

山田浩之、2010、「信頼と不信——錯綜する教師へのまなざし」(『教育社会学研究 86』, 59-74)

吉澤夏子、2012、『「個人的なもの」と想像力』勁草書房